

○タロコキフジについて (常谷幸雄) Yukio JOTANI: On *Stachyurus Sigeyosii* Masamune

1972 年 3 月下旬、台湾花蓮県天祥車站附近で、キブシ属 *Stachyurus* の 1 種を得たが、台湾各地で広く見られるヒマラヤキブシ (タイワンキブシ) *S. himalaicus* Hook. f. et Thoms. と異なり、タロコキフジ *S. Sigeyosii* Masamune in Trans. Nat. Hist. Soc. Form. 28: 287 (1938) に当るものと思われた。1974 年 3 月上旬、再び天祥の祥徳寺境内でそれらしいものに会ったが、附近には *S. himalaicus* と思われるものもあったので、それらを互に比較して見る事ができた。先日当教室の中村武久助教授が台湾大学を訪れた際、*S. sigeyosii* の基準標本をしらべてもらったが、その結果著者が得たものは *S. Sigeyosii* と認めてよいと思われるので、祥徳寺境内で観察した結果について述べる。

S. Sigeyosii Masamune: 若枝に毛がない。葉縁の欠刻は後者に比して荒く、多少不揃いである。幼芽には毛がなく、展開したばかりの若い葉は鮮紅色を帯び、葉身には表裏ともに毛がなく、葉の生長後も葉柄と葉身の裏面の主脈は着色している。苞には毛がない。花卉は白色に近く、部位により多少紅色を帯び、子房及び花柱も時に紅潮し、子房には隣り合った雄しべの基部に毛がある。果実は未熟であったため充分観察できなかったが、1972 年に得た資料から紡錘形のものと判断される。

S. himalaicus Hook. f. et Thoms.: 若枝には毛がある。幼芽は毛で被われ、展開したばかりの若い葉は汚紅色を帯び、若い葉の葉柄と葉身の表裏の脈上には毛を密生し、これは後に減少するが、葉の生長後葉柄と葉身の裏面の主脈の着色はあまり著しくない。苞には毛があり、ことに先端部に多い。花卉は淡黄色を帯び、子房及び花柱は緑色で紅潮することなく、子房には全面に毛を生じている。果実は概ね球形である。

1975 年 7 月、*S. Sigeyosii* の成熟した果実を見る目的で、祥徳寺を訪ねたが、生育地は崖崩れのため失われており、その目的を達することができなかった。

S. Sigeyosii は、1943 年 Hui-Lin Li 博士により、*S. himalaicus* の異名 (in Bull. Torrey Bot. Club 70: 622) とされて以来、わが国でもそれに従う学者があるが、現地と比較した結果、これらは互に別種とすべきものと考えられる。中国大陸産の諸種については多くの知見を有しないが、文献でしらべたところではこれに当るものに接しない。またわが国の南部に見られるナンパンキブシ *S. lancifolius* Koidzumi とは全く異なったものである。

和名にタロコキフジを用いたのは、正宗厳敬博士の原文に従ったためであり、謝阿才、楊再義氏らの新撰台湾植物名彙には、タロコキブシが用いられている。

著者が採集した腊葉標本は、一部を東京農業大学図書館特殊資料部標本室、一部を東京大学総合研究資料館植物部門に収めたが、その後東京大学所蔵の腊葉標本閲覧中、

1934年田川基二博士により、当時の花蓮港庁 (inter Tobita et Mihara) で採集され、*S. himalaicus* のカバー中に収められていたものは、本種であることを知った。中村助教授にしらべてもらったところでは、台湾各地に広く分布する *S. himalaicus* と異なり、*S. Sigeyosii* は花蓮附近の比較的狭い地域に分布するもののようである。

終りに *S. Sigeyosii* の基準標本その他を調査してもらった中村助教授と、腊葉標本の閲覧や文献について援助を受けた、東京大学総合研究資料館植物部門の大場秀章氏に謝意を表する。
(東京農業大学、伊豆大島ハワイ植物園)

○オオバヤシャゼンマイの減数分裂における染色体接合について (志村義雄・松本 定): Yoshio SHIMURA・Sadamu MATSUMOTO: On the chromosomal association in meiosis of *Osmunda* × *intermedia*

オオバヤシャゼンマイ (*Osmunda* × *intermedia* Sugimoto) の染色体数に関して、栗田 (1963) は $n=22$ を報告され、また辰野・吉田 (1966) は $2n=44$ を示し、核型分析を行ない、このうちの3対の染色体はヤシャゼンマイとゼンマイの各染色体が部分的に組み合わせられ、このシダの雑種性を示唆していることを報告された。志村 (1964a, 1964b, 1972) はこのシダの胞子葉の形質、胞子の形態及び発芽率並びに生態 (三者の住み分け) などの観点から、この雑種性を推定した。

今回筆者等はこのシダの減数分裂を再検討した。1977年3月下旬、志村宅に十数年来植栽しておいた1株のオオバヤシャゼンマイ (富士市三度蒔産) から出芽した、ほとんど地上すれすれ状態の胞子囊穂を採集し、綿毛を除いて、カルノア液で固定し、通常の酢酸カーミン押しつぶし法で観察試料を得た。減数第一分裂中期像を377核板観察し、次の結果を得た。() 内に出現頻度を示すと 22_{II} (36.6%), $21_{II}+2_I$ (3.2%), $1_{IV}+20_{II}$ (31.0%, 図 1-A), $1_{IV}+19_{II}+2_I$ (2.4%, 図 1-B), $2_{IV}+18_{II}$ (15.9%, 図 1-C), $2_{IV}+17_{II}+2_I$ (1.3%, 図 1-D), その他 (9.6%) となり、この結果は栗田と辰野・吉田の相反すると思える結果を包含しうるものであった。このうち四価染色体が2個形成される核板が17% とかなり多く、このことと辰野・吉田の核型分析の結果 (22対のうち3対のヘテロ核型を示した) を合せ考えると、オオバヤシャゼンマイは明らかに構造雑種であり、特に今回の観察から少なくとも4対のヘテロ核型を持つことが推定される。またこのことはゼンマイとヤシャゼンマイ間の種分化の際に二回の相互転座を起したことが示唆されよう。

引用文献

- Kurita, S., 1963. J. Coll. Arts. Sci. Chiba Univ. 4: 43. 志村義雄, 1964a. 日本生態学会誌. 14: 147-153. —, 1964b. 植研. 39(8): 242-246. —,